

高松平野の弥生時代後期

行天 就要

はじめに

弥生時代後期は、紀元後およそ 200 年間で、考古資料や集落構造の変化が大きいことから、弥生社会の大きな変革の時期であると考えられている。本講座では、高松平野での弥生時代中期から後期への変化を集落の動態と弥生土器の様相から、変化の要因について考えていきたい。

1. 弥生時代・弥生土器の概要（図1～図4）

- ・弥生時代は大陸から日本に農耕文化が伝わり、食糧生産が始まる時代である。
- ・青銅器や鉄器などの金属器が伝わり、祭事や農具、武器など生活の中で使用されるようになる。
- ・弥生土器は、弥生時代以前に作られていた縄文土器とは異なり、硬質で薄手の土器である。
- ・主要な器種としては壺、甕、高坏、鉢、器台、製塩土器等がある。その中でも壺は口縁部や頸部の形状から広口壺、直口壺、細頸壺、無頸壺などに分類される。

2. 研究史

- ・弥生時代中期から、弥生時代後期にかけての期間は、社会的・文化的な変化から弥生時代の中でも全国的に最大の画期であると考えられている。
- ・近畿地方では、「環濠集落」や「拠点集落」と呼ばれる大集落が弥生時代中期に最盛期を迎える。弥生時代におけるこれらの大集落は、求心性のある首長が存在し、強力な個人の政治的権力により支配されていたと考えられてきた。
- ・それに対し、「環濠集落」や「拠点集落」を居住域・墓域・水田域を集落の単位とし、「環濠集落」・「拠点集落」は集落の複合であるとする見方もある。
- ・蔵本氏が竪穴住居構造や石器から金属器への生産の移行、弥生時代後期初頭の土器製塩遺跡の増加など中期から後期への移行期を総合的にまとめている（蔵本 2009）。
- ・香川県内の弥生時代の土器編年は、過去の発掘調査により有効な一括資料を伴う遺跡の報告書等でこれまでに多数の編年研究が行われてきた（大久保 1990、信里 2011 など）。
- ・信里氏は香川県内の弥生時代中期中葉から後期初頭までの凹線文土器を中心に編年を行った（信里 2005）。

3. 弥生時代中期後半から後期初頭の土器

- ・信里氏の土器編年（図5・6）を参考に、高松平野の弥生時代中期後半から後期の土器の

変化について考える。

- ・高松平野の弥生時代中期後半の土器：久米池南遺跡の2号テラス・3号テラス

口縁部などに凹線文が施される土器である。中期Ⅱ様式の土器にみられた突帯に施文する土器や斜格子文が施される土器は見られなくなる。

- ・弥生時代後期初頭の土器：上天神遺跡 SD08

中期後半の土器から装飾がより単純化し、簡素なものとなる。中期後半から引き続き凹線文が確認できるが、浅い沈線状になるものや消失するものも確認できる。

- ・器種ごとに中期～後期の変化を細かく見ていく。

- ・広口壺

内面に円形浮文や波状文を施文する形態がみられる。弥生時代後期初頭の広口壺は、凹線文の幅が広くなり、円形浮文から竹管文に変化していることがわかる。また、頸部の立ち上がりやや直立気味に変化し、口縁部の外反が強くなる。

- ・直口壺

中期から頸部に凹線文を施すものがみられるが、後期初頭には沈線化し、口縁部が外反する。

- ・高坏

中期後葉ごろから口縁部が内傾気味に立ち上がり、口縁部内外に凹線文を施す。後期初頭には、凹線は退化し、口縁部は外傾する。脚部に関しては、凹線・沈線が後期初頭には見られない。

・以上のことから、装飾の有無や製作技法に異なる点はあるものの、高松平野の弥生時代後期の土器は、中期の土器の要素を引き継いで制作している土器が多いことがわかる。

・弥生時代後期には上天神遺跡を中心とした半径2～3 kmの地点で、香東川下流域産土器と呼ばれる胎土に角閃石を含む土器が製作され始める。上天神遺跡出土の弥生土器の約9割がこの土器にあたるが、この香東川下流域産土器についても中期までの土器型式を引き継いで製作されていることがわかる。

4. 集落動態について

- ・次に、弥生時代中期から後期の集落動態について堅穴建物を中心に触れる。

・高松平野の弥生時代中期から弥生時代後期の遺跡から検出された堅穴建物の分布を地図に示した。また、1000 m²ごとの堅穴建物の棟数を計算し、遺跡ごとの集落の規模について考える。なお、時期の判別が難しいあるいは不明な堅穴建物については今回の講座では省いて検証を行っている。

- ・弥生時代中期の前半

遺跡数としては少ないものの、奥の坊遺跡群や北山浦遺跡などでは、1000 m²ごとの堅穴建物の棟数は比較的多く、建物の密集している状況が確認できる。

- ・弥生時代中期後半

集落の位置する場所に大きな変化はないものの、高地の集落である久米池南遺跡（調査面積は推定値）を除いては、1000 m²ごとの竪穴建物の棟数は、1棟より少なくなる。

・弥生時代後期前半

中期後半から継続して竪穴建物が建てられる集落がなく、新しい土地に集落が築かれていったことがわかる。竪穴建物の棟数は、中期後半に引き続き、少なくなっているが、上天神遺跡や宮西・一角遺跡では、竪穴建物の棟数が比較的多く、高松平野中央部を中心とする集落が形成されていたと考えられる。

・弥生時代後期後半

それまでの集落分布の傾向とは異なり、高松平野に広く分布するようになる。中期～後期前半に集落が消失した土地で、後期後半に再び集落が形成されることが確認できる。

・1000 m²ごとの竪穴建物の棟数は増加し、主に高松平野中央部で大きな集落が形成され、平野の縁辺部に小規模の集落が成立する。

5. 考察

・集落と土器に見られる変化から、弥生時代中期から後期への変化について考察する。

・土器の型式編年から、弥生時代後期になると、弥生時代中期の土器の様相を継続して変化させるとともに、後期に新たに出現する香東川下流域産土器やその他の地域の土器が搬入されることで、複雑化していると考えられる。

・弥生時代中期前半の集落は、分布する範囲は狭いが、一つの集落に竪穴建物が密集して建てられることが分かった。

・弥生時代中期後半から後期初頭にかけて竪穴建物を含む集落の数が減少し、後期後半に高松平野の広域に分布する集落を確認した。

・中期から後期にかけての環境変化が、集落の断絶または集落の移動を引き起こしていると考えられる。

・セルロース酸素同位体比年輪年代から、弥生時代中期末から後期初頭にかけて、寒冷期を迎えたことがわかっている。

・急激な寒冷化に伴い、生産量の減少や降雨による洪水などの災害が起り、人口減少につながったことが想定される。

6. 今後の課題

・高松平野の弥生時代中期後半の遺跡数が少なく、「環濠集落」や「拠点集落」と呼ばれる大集落が存在せず、むしろ集落としては希薄である。なぜこのように、西日本の中でも近畿地方（若林 2001）とは異なる集落規模になるかの解明には至っていない。善通寺市の旧練兵場遺跡や三木町の鹿伏・中所遺跡では竪穴建物が多数検出される集落が存在するため、それらとの関連も含めて今後検討を行っていききたい。

・今回は竪穴建物のみに焦点を当て、集落の動態について考察を行ったが、墓域や水田など

の生産域も集落の要素として、その周辺に建物を含む集落の存在の有無を検討する必要がある。

参考文献

大阪府立弥生文化博物館 2024 『令和 5 年度冬季特別展 紀元 1 世紀の社会変革 弥生後期のはじまりをさぐる』

大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期～古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会

大久保徹也 2003 「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』

蔵本晋司 2009 「香川県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代後期の社会変化』埋蔵文化財研究集会

中塚 武 2015 「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究 246』考古学研究会

信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年一凹線文期を中心にして一」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』

信里芳紀 2011 「弥生中期後半から後期初頭の土器編年」『旧練兵場遺跡Ⅱ（19 次調査）独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財調査 第 2 冊』香川県教育委員会

深沢芳樹・荒木幸治・石井智大・杉山真由美・田中元浩・中居和志・三好 玄・山本 亮・渡邊 誠 2022 「近畿地方南部地域における弥生中期から後期への移行過程の検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 231 集

若林邦彦 2001 「弥生時代大集落の評価—大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に—」『日本考古学』第 12 号

渡邊 誠 2013 「高松平野における弥生時代後期前半の土器相」『私の考古学』丹羽佑一先生退任記念事業会

近藤義郎他 1986 『岩波講座日本考古学1 研究の方法』岩波書店

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1995 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他